あたたかい応援に感謝を。

5周年キャンペーン

寄付金に500円を上乗せします

2025.3.1-3.31

5th Anniversary キモチと。

皆さま、日頃よりADRA Japanの活動を支えていただきありがとうございます。ADRAは、BOOKOFFの買取サービス「キモチと。」に登録しており、皆さまからお送りいただいた古本やCD、DVDなど不要になったモノの買取金額で、世界の子どもたちが教育を受けられる環境作りを支援しています。
この度「キモチと。」が5周年を迎えるにあたり、「キモチと。」へのお申し込みに対し、1件あたり500円を上乗せするキャンペーンを実施しています。個人による断捨離はもちろん、皆さまが勤めていらっしゃる会社や団体のCSRやSDGs活動として、また学校における教育の一環としても、是非この機会にご利用ください。

【キャンペーン期間】
2025年3月1日～3月31日
【注意事項】
・キャンペーン期間中にお申込みください。
・1回の申込につきお品物10点以上の送付が対象となります。
・同一商品はお値段が付かないため、大量送付はお控え願います。
・お申込み後はご返却いたしかねます。予めご了承ください。
【対象品目】
書籍、コミック・漫画、DVD・Blue-ray、CD、
ゲーム機・ゲームソフトなど

※詳しくは アドラ 古本 検索
もしくはこちらのQRから▶

【 通常総会のご案内 】

アドラ正会員の皆様には、いつもADRA Japanの活動へのご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。
以下の時期に第21回ADRA Japan通常総会を開催いたします。

日時	場所	主な議題
2024年6月中旬予定	・オンライン （URLは総会資料と一緒にご連絡いたします）	・2024年度事業報告承認の件 ・2024年度会計報告承認の件　など

例年日曜日に開催しておりますが、今回は平日夜開催の可能性も含めて検討中のため、正会員の皆さまには日程が決まりましたらご連絡いたします。

応援メッセージ ご寄付いただいた方より、メッセージを頂戴しましたので、ご紹介いたします!

毎年サンタさんからプレゼントをもらった日には、大変な状況にいる人たちのことをいつも忘れないように、心ばかりではあるものの寄付をしています。4人の子どもたちと相談した結果、今年はガザの方々のためにサポートをすることに決まりました。僅かではありますが、ガザの同胞のお役に立てていただけますと嬉しいです。
（ガザ人道支援　千葉県　M.Iさん）

どんなに困難でも、アドラ様のウクライナの方々に不断に寄り添い支援されるスタッフの皆さんに感動と感謝の気持ちでいっぱいです。今回もわずかですが、厳しい冬を少しでも暖かく、子供達に喜んでもらえるように、願っています。
（ウクライナの子どもたちに心温まる贈り物を｜クリスマスギフトキャンペーン　新潟県　K.Yさん）

26年前ミャンマーの同僚にミスを被ってもらってしまった事があります。今思うととても申し訳ない事をしてしまったと後悔してもしきれません。連絡先も知らないので、謝る事も出来ない今、ミャンマーの為に出来ることをしようと思い、寄付させていただく事にしました。この場を借りて謝らせてください。本当にすみませんでした。
（ミャンマー支援　埼玉県　Y.Hさん）

大好きな五味太郎さんとのコラボ、最高です。応援しないわけにいきません。もどれる家があることで、人と人の間にあるぬくもりが守られますように。
（「にげたひよこの帰る家がこわれています。一緒に直してくれませんか？」キャンペーン　神奈川県　M.Mさん）

ADRA Japanは「人間としての尊厳の回復と維持」を実現するため、キリスト教精神を基盤として、人種・宗教・政治の区別なく世界各地で国際協力活動を行っています。

ホームページ
https://www.adrajpn.org/

発行人　青木 泰樹

発行　認定NPO法人 ADRA Japan（ アドラ・ジャパン）
〒150-0001　東京都渋谷区神宮前1-11-1
TEL：03-5410-0045　FAX：03-5474-2042
E-mail：support_adra@adrajpn.org
Facebook：adrajapan　X（Twitter）：ADRA_Japan
Instagram：adra_japan　LINE：https://lin.ee/sbm2uFM
YouTube：@ADRAJapan

団体概要

法人名	特定非営利活動法人 ADRA Japan
所在地	〒150-0001　東京都渋谷区神宮前1-11-1 （JR原宿駅 徒歩5分、東京メトロ明治神宮前（原宿）駅 徒歩2分）
代表者	柴田 俊生（理事長）
事務局責任者	青木 泰樹（常務理事／事務局長）
創立年月日	1985年3月30日

デザイン：TIMA GEVOEL Co.Ltd.

ADRA News

2025.3 Vol.143

東日本大震災と能登半島地震
～支援の現場でつながる経験と想い～

在宅被災者の訪問調査を開始（石川県）

Justice, Compassion, Love

能登半島の震災から1年以上が過ぎました。
被災した地域では、いまだに多くの人々が支援を必要としており、
国や県、地域、支援団体などによる復旧・復興活動が続いています。
今回は、東日本大震災で避難者となった経験のあるスタッフの視点を中心に、
支援の現場でつながる経験と想いをお伝えします。

東日本大震災と 能登半島地震

～支援の現場でつながる経験と想い。誰一人取り残さないために～

持ち家に住む高齢者の方から、『家財道具を処分したいのでボランティアに入ってほしい』という依頼をいただくことがあります。このような要請は特に注意しています。離れて暮らす家族がその話を知らず、意見が食い違うことがあるからです。

以前に、60代の男性から『大切にしていたものを、母親が勝手に処分してしまった…』と、家の片付けに関する悩みを打ち明けられました。震災後、多くの家庭で家財道具の処分をめぐるトラブルが発生しています。家族間で共通認識がないまま片付けを進めた結果、関係がこじれるケースも少なくありません」

こう話すのは、現在ADRAが行う能登半島での支援活動を担当する福島県出身の大澤明浩です。能登で見聞きすることは、自身が経験した東日本大震災と重なることが多く、その体験が現場での判断や対応に活かされています。

「福島県飯舘村にある実家で、片付けをしたい私と、したくない父の間で意見がぶつかったことがありました。そういう経験があるので、持ち物の処分に関するお話は一旦持ち帰って、社協や他のスタッフと情報共有を行い、ご家族の同意が取れているかを確認した上で、慎重に対応しています」

さらに大澤は続けます。

「さまざまな場面で、東日本大震災のことを思い出します。きれい好きな母が避難先の家では片付けなくなりました。帰省した際、『家の中、ちょっと汚くない？』と言ったら、母は『自分の家ではないから、片付ける気にならない』と強い口調で返してきました。元の家に暮らすことができない住民の中にも、似たような気持ちを抱えている人がいるだろうな、と考えてしまいます」

ADRAはこれまで、石川県七尾市と穴水町にて、生活再建を目指す方々に寄り添いながら支援を続けています。最近では、強風や積雪で破損したブルーシートを張り替える屋根での作業対応や、住民の方の足となるお出かけ支援、在宅被災者への戸別訪問を開始しました。現在は、復興の手が足りていない奥能登にボランティアが入りやすくなるよう、宿舎となる場を整備すべく準備を進めています。

「被災された方の在宅訪問で、地震後に脳梗塞を発症し、少し障害が残りながらも回復された高齢の女性にお会いしました。実は、私の母も震災後に脳梗塞で倒れ、帰らぬ人となっています。同じ病に倒れながらも生き延びた姿を見て、心から『よかった』と感じました。

私も、私の家族も、そして能登の人たちも、大変という言葉では片付けられないほどの経験をしてきました。支援する側として活動している今、一人ひとりの声にしっかりと耳を傾け、その人に寄り添った支援を届けられるよう努めていきます」

「誰一人取り残さない」―この理念のもと、ADRAは引き続き住民の声に耳を傾け、必要な支援を届けていきます。

活動ピックアップ

■お出かけ支援

巡回バスの本数が減り、移動が困難になった地域住民のため、穴水町の東端に住む方々が週に1回、片道30分かかる町の中心地へ行けるよう社会福祉協議会とお出かけ支援に取り組んでいます。震災後の移動販売では、品揃えが限られていましたが、町中まで行けることで、住民の方々にとって“選択肢のある買い物”が実現。肥料や、2Lペットボトルの水など、移動販売では手に入らないものも購入でき喜ばれています。よい気分転換の機会にもなっているようです。

■在宅被災者訪問

2025年2月から在宅被災者への訪問を始めました。家や生活に関すること、健康面、罹災証明に応じた助成金などの申請有無、家の修繕など、お困りごとがないか丁寧にお話を聴いて回っています。在宅被災者への訪問調査は、今後、社会福祉協議会や役場、支援団体、大学ボランティアなどと協力しながら、穴水町の約2,800全世帯を訪問する予定です。

※Webで「アドラ 能登」と検索、もしくはこちらのQRを読み込むかクリックすると、能登半島での他の活動状況をご覧いただけます。

在宅被災者を訪問する大澤（写真左）

中心地へのお出かけ支援は
多くの高齢者から喜ばれている

移動カフェではサポートに入った
ADRAスタッフより国際協力について談話することも

強風や積雪の影響でブルーシート張り替え支援も増えてきた

The SCENE
～ADRAスタッフが見た情景～

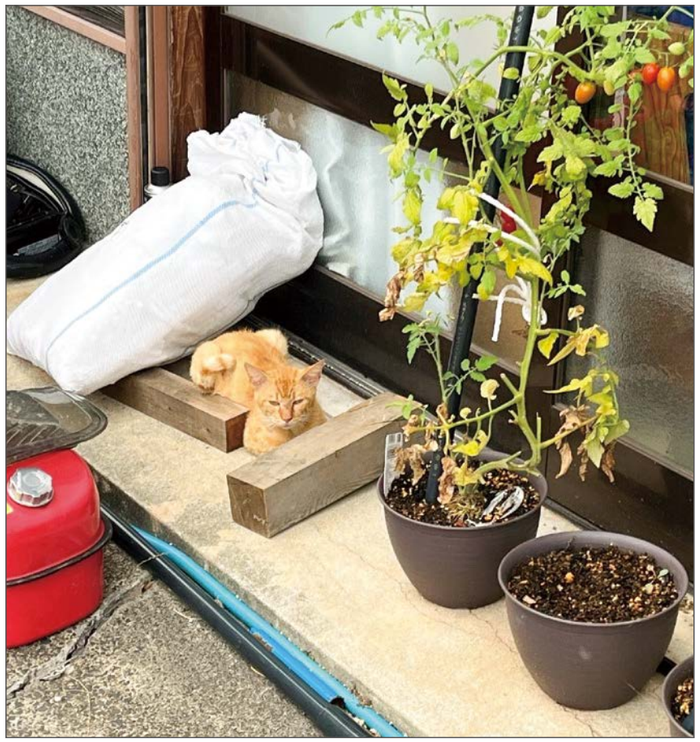
ADRAの支援の現場には、さまざまな「SCENE（シーン）」があります。
笑顔が生まれる瞬間、悩みながら進む日々、スタッフの心に響いた出来事…。
そんなリアルなひとコマを、このコーナーでお届けします。

「小さなお客さん」～能登半島より～

気付けばこの地に足を踏み入れてから、1年が過ぎていた。毎日多くのボランティアや住民でにぎわっていたADRAの事務所も落ち着きを取り戻し、今では1日に数人が訪れる程度になっている。穴水駅前の状況も大きく変わった。倒壊しかけていた家屋も解体が進み、事務所の周辺には所々空き地が目立つ。穴水の様子もすっかり様変わりした。

今から9か月以上前、まだ夏とは呼べないような、少し冷たさと土の香りの残る風が吹く頃、穴水事務所には近隣の住民に混ざり、小さなお客さんが連日訪れていた。

我々は、その少しやせ細ったトラ猫を「ちゃーさん」と呼んでいた。近所に住む方が付けた名前だ。まだ1歳くらいの幼さが残るちゃーさんは、毎朝8時頃になると事務所を訪れ、トマトの苗が植えてある植木鉢の後ろや住宅の補修で余った木材に寄りかかり、ただじっと事務所を出入りするスタッフやボランティアを、何をするわけでもなく、まるで置物のように眺めていた。


毎朝8時頃になると事務所を訪れる猫のちゃーさん

9時頃に気付いた時には近所のパトロールに出かけており、また夕方になると定位置に戻る。我々の監視業務を遂行し、暗くなるとまたどこかへ出かけるのである。人馴れしている様に見えるが、決して人間の手が届く範囲には近づかない。孤高のちゃーさんなのだ。

しかし、そんな彼の平和な時間が脅かされる。

近所の方いわく、もともとこのハチワレ猫はちゃーさんを見つけると追いかけ回していたそうだ。かわいらしい顔つきで人馴れしているが、前足の太さや顔に傷がないことから、この辺りでは無敵なのであろう。筋骨隆々の、人間に例えるとプロレスラーのような見た目をしたこのボス猫は、ここ最近になって事務所の前まで縄張りを広げたため、ちゃーさんと鉢合わせる機会が増え、よく喧嘩をしていた。そして、気付いたらちゃーさんは事務所に寄り付かなくなってしまった。

1日・1週間・1か月と待っても現れることはなく、毎日の楽しみにしていた彼との時間に寂しさを感じつつも、その後音沙汰は無く、いつの間にか年が明けてしまった。

しかし、つい先日近所を歩いていると、どこかで見たような柄の猫が目の前に飛び出してきた。

冬毛になっただけではないだろう。恐らく新しい家が見つかったのか、少しふっくらとしたその猫には、確かにちゃーさんの面影があった。呼びかけると一瞬立ち止まり、こちらを一瞥（いちべつ）する。まだ覚えていてくれているのか分からないが、とにかく無事で良かった。考える間もなく、彼はどこかへ走り去っていった。またいつか、我々の元へ戻ってきてくれるだろうか。そう思いながら事務所への帰路をたどった。

ちゃーさんを見つけては追いかけるハチワレ猫

ADRAは様々な地域で足湯やカフェを行ってきた。毎回の様に来ていた住民が、ふと来なくなることがある。自宅の片づけや仕事が忙しかったり、気持ちが落ち込んでいたりなど、様々な要因が挙げられるが、決してそれは悪いことではない。自分なりの復興へと歩みを進めている証拠である。便りのないのは良い便りとよく言ったりするが、何かの拍子に顔を出していただけたら温かく迎える。住民だけではなく、ちゃーさんや誰にとっても安心できる場所。穴水事務所はそのような存在でありたい。

しばらく見ないうちにふっくらとしたちゃーさん

ADRAの
Webページのご案内

ADRAのWebページでは、スタッフによる個性豊かな記事を多く載せています。他の記事もお読みになりたい方はWebで「アドラ つぶやき」と検索、もしくはこちらのQRを読み込むかクリックすると、ご覧いただけます。

■ 執 筆

三牧 晋之介／MIMAKI SHINNOSUKE

もともと旅行が好きで、日本を含め世界各地を旅していました。自分が国際協力に携わるとは思っていませんでしたが、人と関わる仕事を志す中でご縁あって入職しました。九州の災害被災地域に駐在したときには、災害時の社会インフラの弱さを目の当たりにすると同時に、自力で自宅の修理をする方のたくましさや、災害が多くとも引っ越しをしない"先祖代々住んでいる土地"への強い想いを知りました。被災を乗り越えた方から「今は家でのんびり過ごしているよ」という声を聞けるとき、大きなやりがいを感じます。

皆さまの支えで取り戻せた笑顔―1,200人に届けられた希望と感謝をこめて

患者さんと家族、そして日本の医療チームで記念撮影

唇や上あごが左右に分かれた状態で生まれてくる口唇口蓋裂。ADRAがネパールへの医療チーム派遣を開始した1995年当時は、同国で口唇口蓋裂の形成手術を行える医師はわずか1人しかいませんでした。ADRAが毎年50人への無料手術を提供するようになってから30年。今では多くのネパール人医師が育ち、手術費用をサポートする支援団体も増え、支援方法を再検討するため、医療チーム派遣については一旦終了することにいたしました。

今年2月、医療チームを代表する7人の医療関係者と共に、機材などの片付けにシーア・メモリアル病院を訪ねました。そこには、以前手術を受けた患者さんたちが、遠くから集まっていてくれました。

「口を大きく開けて、あ～、という形にしてみて」

2015年に上あごの大きな穴を塞ぐ手術を受けたプレムくんに、形成外科医の吉本医師が声をかけます。

プレムくんは「あ～」と口を開けると、きちんと上あごができているのが見えました。

「うん、大丈夫そうだね。なにか気になるところはありますか？」という問いに母親が答えます。

「発音がちょっと気になります。カーという発音がツァーという風に聞こえますね。わかるときもありますが、2、3回聞き直すこともあります。」

吉本医師は「なるほど」とうなずき、プレムくんに「パ、ピ、プ、ペ、ポ」を言ってみるように伝えました。

「パァ、ピィ、ゥ、ペェ、ポォ」

「プの発音が弱いかな。筋肉を鍛えるためにコップに水とストローを入れ、水中で空気をブクブク出す練習を毎日してみようか」吉本医師の言葉に、プレムくんはしっかりとうなずきました。

会いに来てくれた患者さん全員と同様の会話をもったあとは、風船を膨らませて楽しみました。上あごや唇に裂け目があったころにはできなかった遊びです。こうした遊びは、口のトレーニングにもなります。楽しそうな笑顔が、印象的でした。

本活動は、多くの医師、看護師、ボランティアの方々、そして企業、団体、学校、個人の支援者の皆さまに支えられました。無償手術を届けることができた患者さんの数は、延べ1,200人以上。社会の好奇の目に晒され、迫害を受け、就職や結婚にも影響を及ぼしてきた口唇口蓋裂の患者とその家族に、笑顔を取り戻すことができましたこと、心より感謝申し上げます。

医療チームの派遣という形での支援活動はこれにて幕を閉じますが、まだ必要な医療（サービス）を受けられていない患者さんがネパールには多くいるという現状もあります。私たちにできる形で、助けを必要とする一人ひとりに寄り添っていけるような支援を検討しています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

大きく口をあけるプレムくん

風船を膨らませた後、空気が抜ける音で笑うアイロジュくん（2017年に手術）

アドラのチカラ

ADRA Japanを支えてくださる方をご紹介します！

竹内友規さん
会社員

── ADRA Japanをお知りになったきっかけ

直接的にはJICA Partnerのボランティア募集だったと記憶しています。毎日勤め人として過ごしている中、途上国の方に役に立つ活動がしたいと思っていた時に、当時ADRA Japanさんが募集していた「ライティングボランティア」の存在を知り、応募したのがきっかけです。

── ADRA Japanとの関わりについて

今はWebサイトの作成の補助をオンラインボランティアで参加しています。もともと地方在住でオンラインでもできるボランティアという中で応募したのでその流れですね。ボランティアとして参加できるのもうれしいですし、Webサイトの作成についての知識がつくのもうれしいです。また、数年前に関東に戻ってきたので、2度ほどADRA Japanの事務所のイベントに参加しました。

── ADRA Japanの魅力や関わっていてよかったこと

Webサイトの作成補助を通じて過去のADRAの活動から知ることができました。常に被災者や途上国の方一人ひとりに寄り添うといった一貫した姿勢は大変魅力的です。あとやはり普段の生活では知り合えない方と知り合えることが関わってよかったです。

── まだADRAのことをご存じない方へのメッセージ

私は途上国へのボランティアをするというと現地に行く、寄付をするといった考えが先に浮かぶ世代です。そんなことは決してなく、ADRA Japanさんではオンラインでのボランティアもあり、それを通じて自分の世界が少し広がった気がしています。もし、私と同じような感覚の方がいらしたらまずはのぞいてみることをオススメします。

── ADRA Japanへのメッセージ

皆さんお体に気をつけて。私もこれからWebサイトに限らず参加していきたいです!!